

浦和実業学園中学校

2024年度

入学試験問題

<第1回 午前4科型>

国語

時間 50分

【受験上の注意】

1. 合図があるまでは、問題用紙を開かないでください。
2. 受験番号・氏名は問題用紙にも必ず記入してください。
3. 解答はすべて解答用紙の所定のところに記入してください。
4. 解答用紙は使いやすいように折ってもかまいません。
5. 問題用紙は回収しません。書き込みをしたり線を引いたりしてもかまいません。
6. 字数制限のある問題の場合は、句読点や符号、促音「っ」、拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」なども一字分として字数に含めます。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問一

——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 学校と家をオウフクするだけの日々。
- (2) スポーツクラブの会費をオサめる。
- (3) 彼ほどメイロウな少年はいない気がする。
- (4) 来週までに病気はゼンカイするだろうか。
- (5) 経済はシュウシのバランスが大切らしい。

問二

——部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- (1) 水を注ぐ手がふるえる。
- (2) 質問がある人は挙手してください。
- (3) 曲がったことのできない性分だ。
- (4) 災害に便乗した商法は許せない。
- (5) お茶を飲んで気を和らげる。

問三

□にあてはまる言葉として最も適当なものを後からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 根も□もないうわさは一体どこから出てくるのか分らない。

ア 花 イ 実 ウ 葉 エ 草

(2) 手に□を握る接戦をものにしてわがチームは勝利をおさめた。

ア 涙 イ 汗 ウ 水 エ 雨

(3) 互いの腹を□合った後、本当の信頼関係が生まれる。

ア 探り イ 調べ ウ 計り エ 突き

(4) 一度失敗したからといって墓に懲りて膽を□ようでは進歩がない。

ア 切る イ 吐く ウ 引く エ 吹く

(5) 受付で取りつく□もなく追いつ返されてしまった。

ア やま イ しま ウ ひま エ たま

二 次の文章1と文章2をそれぞれ読んで、後の問いに答えなさい。

文章1

【第1段落】私は人間ですから、人間を特別視しないことはできません。それは当然のことです。しかし生物学を学んできた者として言えば、ヒトを特徴づける頭脳が優れているということは特別な能力であることは確かですが、それは一つの能力なのであって、ヒトよりも優れたさまざまな能力を持つ動物は無数にいます。頭脳以外の能力は取るに足らないと、なぜ言えるのでしょうか。

しかし歴史的事実は、その一つの能力が卓越していたヒトが、地球の歴史からすればごく最近になって急激に増加して地球の自然を破壊してきたということです。そのために絶滅した動植物が無数にいます。その絶滅が20世紀の後半から急激に増えているのです。

私は生き物のつながりを研究してきましたから、ある生き物が減少したり、いなくなったりすることが、思いもかけない結果を生むことを学びました。そして東京に住んでいると、ある日突然、前日まで空に向かって枝を伸ばしていた立派なケヤキが根元から伐採されているのを目の当たりにする場面をたくさん見てきました。

A、長く観察してきた玉川上水で樹木が伐採され、その結果、野草が消滅したり、野鳥が激減したりするのも見えました。それどころか、新しい道路をつけるためとか、大きな建物を作るために林が伐採されることもしばしば目にしてきました。私たちが都市で生きるということは、そこにいた生き物を抹殺したことにほかなりません。

人は不当に攻撃されれば、相手を非難します。非難するだけでなく敵に対して戦いを挑みます。しかし樹木は伐られるまま、動物はただ消えていくだけです。それだけに余計に心が痛みます。植物は痛みを感じないとか、動物は苦痛を感じないと言われます。そうであるかもしれませんが。しかし生き物のことを学び、そのつながりを調べてきた私には、伐採さ

れる木の痛みはわかるし、消えゆく動物の悲しみもわかります。いや、十分にわかったといえないかもしれません。それでも、動物や植物の声を聞けるようにになりたいと思います。

【第2段落】私はこの本を読んだみなさんが、生き物の命の尊さについて共感してくれたと信じます。そして、みなさんがお父さんやお母さんに「ダンゴムシって大事なんだって」とか「メダカがいなくなったらしいけど、守らなくちゃね」と言っただけです。想像されるのは「その気持ちはわかるけど、世の中はそんなもんじゃないんだよ」という大人の反応です。

つまり子供はサンタクロースを信じるように、非現実的なことをいうが、現実にはサンタクロースはいないし、メダカがいなくなっても人間の生活に困ることがあるわけではないというわけです。

それでもみなさんがさらに主張したら「メダカのような小魚と人の命のどっちが大事か、考えればわかるだろう」というような返事が返ってきておしまい、ということもあるでしょう。

しかしこれは二重の意味でまちがっています。一つは、人の命がメダカの命より価値があるのが正しいとは言えないからです。メダカは小さく人が大きいからでしょうか。では、ゾウは人より価値がありますか。人は知能があるからですか。なぜ知能という、生物が持つ多くの性質の中のただ一つのものが特別の価値があるとされるのでしょうか。ヒトは鳥のように空は飛べないし、モグラのようにトンネルを掘れないし、イルカのように泳げません。人ができなくてほかの動物ができることは無数にあります。知能だけが価値があるとの根拠は曖昧で、それは人間がそう考えているだけのことです。

もう一つのまちがいは、メダカだけをとりあげて比較することは適切ではないという意味に於いてです。メダカがいるということは汚染されていない水があり、そこにプランクトンも生きていますということですから、メダカがいなくなることはそのことが果たされていないことを意味します。それは人が住む環境も、あるレベルを超えた汚染段階にあるということです。その意味で、人間中心に考えてもメダカのないことは危険だということです。

B メダカがいる、いないだけでなく、メダカを環境を総合的にとらえれば、メダカがいなくことの意味が理解されるのに、問題を「メダカか人か」というレベルにとどめるのは正しくないということです。それでは大切なことを見失ってしまいます。さらに言えば、子供より大人の方が正しいとは限らないということもしばしばあります。

このような例は無数にありますが、一つだけ具体的な例をあげて考えてみたいと思います。1章で玉川上水のタヌキのことを書きましたが、玉川上水は江戸時代に作られた水路で、上水、つまり人々の生活用水を確保する水路でした。その役割は1965年まで続き、部分的には今でも機能しています。

できたときの玉川上水は、西の羽村から江戸の四谷までの43キロメートルありましたが、1965年に杉並区くがやまの久我山くがやまよりも下流の13キロメートルは暗渠あんきょになりました。暗渠とは、要するに蓋ふたをして水を地下で流すことです。その結果、ここから下流は道路になり、樹木はもちろん、野草もなくなり、昆虫も鳥も、もちろんタヌキも住めなくなりました。

なぜそんなひどいことをしたのでしょうか。当時は日本が高度成長期で、東京は1964年のオリンピックを控えて街中を工事で改修していました。当時の人たちにとっては、玉川上水があることはむしろ邪魔じゃまであり、当然のように、蓋をして道路をつけた方が都民にとって便利でプラスになると考えられたのです。ですから、杉並より上流も同じように暗渠にすると決められる可能性は十分にあったし、もしそうなってれば多様な樹木やその下に咲く野草、昆虫、野鳥なども消滅していたはずなのです。

玉川上水の暗渠工事は一部だけで止まってよかった、なんとかこれからも残してほしいと思いますが、東京にはその高度成長期に計画された道路があり、今でもその拡張計画が進められています。そういう計画を進めるとき、動植物の調査もおこなわれて、計画の妥当性が検討たとうせいされますが、基本的には「希少な動植物はいないか」ということが基準になります。都会の緑地でも希少な動植物はいるにはいますが、なんといいっても都会のせまい緑地ですから、そういう動植物は少ない、あるいはほとんどないということも多くあります。そして、それが工事をしてもいいという免罪符めんざいふになります。

しかし、この本でくり返し述べたように、ありふれた普通の動植物がいることには、大きな価値があるのです。それらの生き物がつながりあって生きていることを知れば、そのことが私たち人間の生活にも大きな意味を持つことが理解されます。

【中略】

【第3段落】動物や植物をそのような歴史的存在としてとらえたとき、私たちの心には自然にその存在に対する敬意に似た気持ち湧いてきます。そしてそこには、日本であれば、日本列島とともに生きる者として共感することができます。私たち人間の限界から、動植物を見る目はしばしば偏見へんけんでくもりがちになります。

でも生物学、とくに生態学の見方に立つことで、その偏見は小さくすることができます。そのことは『野生動物と共存できるか』でも『動物を守りたい君へ』でも書いたつもりですが、とくにこの本で伝えたかったのは、今の日本が都市化していることから生まれる心配です。

ここで私が言う「都市」とは、東京や大阪のような大都市だけではありません。それは自然から離れて、**C**として生活することです。つまり、都市生活とは、人口密度の高い空間で大量の物資とエネルギーを取り込んで、大量の廃棄物はいきぶつを生み出す暮らしをすることです。その意味では、みなさんの大半が都市住民といえるでしょう。

都市生活をする、どうしても自然が乏しいとほので動植物と接する機会が少なくなります。しかしヒトもまちがいなく自然の中で進化してきたのだから、私たちのDNAの中にはサル的一种としての「血」が脈々と流れています。子供は年齢ねんれいの違う子供同士が一緒で遊ぶものだし、ケンカもし、仲直りをして育っていくものです。でこぼこの地面を歩いて、草を見たり昆虫を見つつけたりします。痛い思いをしたり、危ないことを体験したりして、そのことを覚えていきます。それは

どの時代のどこの社会でも同じです。

もちろん都市化に伴うプラスの面は無数にあります。自給自足をしなくても効率的に物資が確保できるようになりました。水道や電源が確保されたりしてからは、生活が革命的に便利になりました。私たちはそうした利便性に大いに恩恵おんけいを受けています。

D、それと同時に、都市にはマイナス面もあります。自給自足でなくなったことは貧富の差をうみ、お金がなければ貧困生活を余儀なくされます。人口が集中したことは衛生上の問題をうみ、伝染病の感染などは都市生活において深刻なものとなりました。

それは医学の発展で大幅に改善されたとはいえ、21世紀の現在においても新型コロナウイルスの登場によって私たちの生活はおびやかされました。交通や物資の流通が発展したために、伝染病の感染が大幅に促進そくしんされました。

【第4段落】アメリカの生物学者ジャレド・ダイアモンドは、人類が、例えばイースター島のように自分たちの社会を崩壊くわいさせた例や、マンモスやモアのような動物を捕り尽くして絶滅させた悲劇は無数にあることを説明した後で、次のように書いています。

実は、過去において生態学上の悲劇的な失敗を犯した人と私たちのあいだには決定的な違いが二つある。こうした人たちに欠けていた科学的な知識が私たちにはあること、⁴その知識を伝えあい、共有できる手段が私たちにはあることだ。

（『若い読者のための 第三のチンパンジー』）

そう、私たちは文字を持たなかった時代の先祖とは違い、学びさえすれば正しい知識や考え方を知ることができるのです。このことは人類のかけがえのない遺産であり、誇るべきことです。そのことを思うことで、私は未来に生きるみなさ

んに前向きのエールを送り、明るい世界を期待することができます。

(高槻成紀『都市のくらしと野生動物の未来』)

※注 ・卓越：すぐれていること。

文章2

現在の私が最終的に到達したのは、世界を人間の目、人間の立場からだけ見るのもう止めようということ。人間もあくまでも地球上の生物の一種にすぎないのであり、動物と我々は仲間なのです。そういう観点に立つて他の動物の目で人間を見るとどう見えることか。これがおそらく最高の自己客観化になるでしょう。

人類の中でも欧米人は、俺がこう思うということだけが正しい、と決め込む傾向が極端に強いけど、それは間違い。そうじゃなくて、他の動物、羊やウサギの目、さらには人間によって切り倒される樹木や朝顔のつるなどから人間を見ると、お前ほどひどいものはないよということになるでしょう。これは欧米人には全く理解できない発想ですが、日本人であれば、まだ理解可能なはず。日本語と日本文化にはまだ古代性が生きているおかげで、世界を欧米人のように人間だけの独りよがりの高みから見る傲慢な悪癖から比較的フリーになれるはずだからです。知能があるのは人間だけで、ことばがあるのも人間だけなどといった考え方はとんでもない間違いだとお互に分かり合えるからです。

私の言語学では、鳥のコミュニケーションをうんと研究してきましたが、ヨーロッパの言語学ではそれは研究テーマにならなかった。なぜか。ヨーロッパ系の言語学者は言語を全て知能と関係づけるから、オランウータン、チンパンジー、ゴリラだけを研究してきたからです。これらの類人猿が人間に一番近い動物で知能レベルも人間以外では一番高いと思いついてきたからです。これに比べれば鳥なんて頭も脳も小さいし、人間と対比させて研究するなんてありえないと決めつけてきたからです。そういうえば、birdbrainという英語は「バカ」という意味でしたね。事ほどさように鳥をバカにし、見

向きもしないでやってきたのです。そもそも言語を研究する上で、脳を第一義的に云々するのは間違いで、一番大事なものは音声であるにもかかわらず、です。

(鈴木孝夫『世界を人間の目だけで見るのもう止めよう』)

※注 ・事ほどさように：それくらい、それほど。

問一 **A**・**B**・**D**に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|------|---|------|
| ア | A | しかも | B | すると | D | なお |
| イ | A | しかし | B | そして | D | それとも |
| ウ | A | また | B | つまり | D | しかし |
| エ | A | だから | B | ところで | D | つまり |

問二 ―部①「余計に心が痛みます」とありますが、筆者はなぜこのように述べるのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は消滅の危機にある生き物を見ても、自分たちの生活が一番重要と考えて、それらを守るための行動を取ろうとしないから。

イ 環境がどのように変化しても、人間はそれらに対応するための頭脳を持つが、その他の生き物はそのような能力を持たないから。

ウ 生き物やそのつながりを学んできた者として、消えて無くなる生き物の悲しみや痛みが、一般の人間よりも理解できてしまうから。

エ 生き物は自己の存在を危うくさせるものへの反撃どころか、非難の試みさえも果たせないまま、消滅の運命に置かれてしまうから。

問三 ―部②「これは二重の意味でまちがっています」とありますが、筆者がこのように述べる理由を次のように説明したとき(i)～(iii)の空らんにはまる言葉を【第2段落】から探し、抜き出して答えなさい。ただし□一つを一字分とします。(ii)は二つあります。

◎「メダカのような小魚と人の命のどっちが大事か、考えればわかるだろう」という発言が問題なのは、一つには、存在の大小、□□の有無などの人を中心とした曖昧な根拠に基づいて、□□の軽重が価値づけられているからである。また、もう一つの問題は、メダカの□□を軽視し、その生育環境に目を向けないことは、人間の生活環境が、ある水準を超えた□□□□に置かれているという状況を見落としてしまうことにつながるからである。

問四 ―部③「それが工事をしてもいいという免罪符になります」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 希少な動植物のほとんどいない緑地が道路拡張の予定地となっているが、そのような動植物がないと分かれば、工事は妥当なものとして許されてしまうということ。

イ 道路拡張予定地には多様な動植物が生息している場合が多いが、計画はすでに決められているので、生態系の保持を優先しながら工事を進めてもよいということ。

ウ 道路拡張計画は希少な動植物のいない所で進めなければならないが、住民が道路を必要なものと判断すれば、その有無にかかわらず工事が許されてしまうということ。

エ 道路の拡張計画はいつでも改められるものであるが、希少な動植物は一度消滅すると二度と再生しないので、工事を強引に進めることは認められないということ。

問五 Cに入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 加害者 イ 消費者 ウ 事業者 エ 愛用者

問六 ―部④「その知識を伝えあい、共有できる手段」とありますが、これは具体的にどのようなものを指していますか。それを表す言葉を【文章1】の【第4段落】から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問七 〓部A「頭脳以外の能力は取るに足らない」とありますが、このような人間の見方について、同じ内容のことが文章2でも述べられています。その部分を文章2から「という考え方」に続くように二十五字で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

◎ 二十五字 という考え方。

問八 〓部B「動物や植物の声を聞けるようになりたいと思います」とありますが、人間が「動物や植物の声」を聞けるようになるには、どのようなことが必要であると文章2では述べていますか。「のを止めること」に続くように十九字で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

◎ 十九字 のを止めること。

問九 文章1と文章2を説明したものとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文章1 文章2 はともに、知能を持つ人間が生物界全般のなかで、ひとりよがりになっていることを批判している。その上で、他の生物の痛みを理解できるような視点やものの見方を持つことの重要性を述べている。

イ 文章1 では動植物への正しい感覚は人間の住む環境への正しい理解にもつながる大事な視点だと述べている。

一方文章2 では動植物の視点を人間が持つという発想は、日本文化だからこそ実現できると主張している。

ウ 文章1 文章2 はともに、人間中心の世界観からぬけ出すことの重要性を述べている。しかも、それを実現するためのヒントは、自然に寄りそう感性を育んできた日本にあると指摘している。

エ 文章1 では生物学的、生態学的な研究の積み重ねから、人間の自然観や世界観の問題点を示している。一方文章2 では動物学的な視点から、知能を重視する言語学のあり方を批判している。

三

次の文章は庄野潤三『ビニール水泳服実験』の一節です。高校の水泳部顧問矢島先生とコーチの鬼内先生の二人は、冬のプールでも泳ぎの練習をできるようにしたいという思いから、ビニール製水泳服の制作を思いつき、星子洋裁店の主人アヤ子の元を訪れます。アヤ子は二人の熱心な願いを聞き入れて、水泳服の制作を引き受けます。以下の文章はそれに続く場面です。よく読んで後の間に答えなさい。なお、設問の都合で本文の上に行数をつけてあります。また、一部表記を改めている部分もあります。

「分りましたわ」

アヤ子は、笑ってそう云った。

「頼みますわ。ええのん、作って下さい」

鬼内先生は、ほっとしたように云った。

「それで、実験はどなたがやりますの？」

「鬼内さんが、やります。だから、これから寸法取って下さい」

矢島先生がそう云った。

「無茶やなあ。わしにやれやれと云って、自分はやらんつもりかいな」

鬼内先生はうれしそうな顔をして、そんなことを云った。

この人は、専任コーチで、先生ではない。家はここから電車で二時間もかかる田舎のお寺だ。七人兄弟の一番末の息子である。

※陸軍士官学校を卒業したと思ったらすぐに終戦になって、それまでの苦勞が水の泡になったという経歴の持主だ。

名前は怖いような名前だが、氣だては優しく、おっとりしていかにも育ちのよさを現わしているような人だ。

15

母校の中学の水泳のコーチをずっとやっていたが、前の年にこの学校にプールが新設されたので招かれたわけである。自分が教えていた生徒も、いま何人かこの学校へ入っている。

「首のところは、どうしますの？」

アヤ子が尋ねた。

「そこが難しいんです。頭まで入ってしまうようにすれば、水は入らない代り、息が出来ない」

「そうですね」

「それで、アノラック、ね。あんな具合に、首の一番上のところで、しぼれるようにしたらと考えているわけです」

「水は入りませんか？」

矢島先生と鬼内先生は、顔を見合せた。

「入らんように出来んやろか、いつているんです」

鬼内先生が云った。

25

「さあ、それはねえ」

アヤ子は、ちよつと考え込んだ。

「無理ですか」

矢島先生が尋ねた。

「首のところから身体を入れるのでしょうか」

「ええ」

「それで、全部身体を入れてしまってから、首のところを紐で締めるようにするんですね」

「ええ、そうなんです」

30

「そうしたら、やっぱり少し入るわ」

「むろん、顔はつけないで泳ぐつもりなんですが」

「なるべく、首を伸ばすようにして泳ぐのね」

「ええ、そうです。そういうつもりなんです」

アヤ子は、何ということなく溜息をついた。

矢島先生は、考え込まれては大変と、膝を乗り出して云った。

「つまり、僕らはどの程度までやれるかということを知りたいんです。普通のように泳ぐのは無理だということは分っているんですが」

「頼みますわ。もう僕は、濡れてもいいと思っています」鬼内先生はそう云った。

「そうですか。それなら、とにかく、一回作ってみることにしましょう」

アヤ子はそう云って、椅子から立ち上った。

「では、寸法を取りますわ」

「有難い」

と鬼内先生は云った。

【中略】

矢島先生はこのプールの主である。プールで暮すことを生活の理想としている。

前の年の六月に矢島先生たちの年来の希望が実現して、校庭から道一つ隔てたここにプールがつくられた時から、そう

である。

シーズン中は、全くプールで暮しているようなものだ。暗くなってプールの上に張り渡した針金にぶら下げた電燈がともる頃までである。

コース・ロープを全部引き上げて、部員を帰してしまっただ後も、すぐには帰る気がしないで、何ということなく、プールに留まっていた気がする。

飛び込んで広い水の中をゆつくりと一人で泳いだり、潜って水の底のごみを拾ったり、すっかり暗闇の中に沈んだまわりの世界を眺めている。

矢島先生はプールのまわりに薔薇の苗を植えた。冬になってからも、授業のない時には、何遍もやって来て、薔薇の様子を見る。時々もみながら撒いたりする。

今のところはまだ薔薇に手いっぱいだが、追々、プラタナスやアカシヤやその他、自分の好きな木をいっぱい植えるつもりでいる。

そのような自然との深い関心の中で、生命感の充溢した、美的生活を送りたいというのが、矢島先生の理想である。

ビニール水泳服の着想と実験も、その理想の一つの現われである。

ロッカー・ハウスから、トレーニング・パンツの上に焦茶のスイーターを着た鬼内先生が現われた。

「ほんなら、そろそろ着てみましょうか」

「さあ、さあ」
コンクリートの上にひろげてあった水泳服を手ぐり寄せて、鬼内先生は足から入れ始めた。矢島先生は、そばから手伝う。

「何や知らん、けつたいな具合やなあ」

「そんなことない。よく合っている。アヤちゃん、うまいこと作ってくれている」

矢島先生はそう云って、急に道の方を見た。

「アヤちゃん、まだ来ないかなあ」

「え？ アヤちゃん、来るんですか」

75 鬼内先生が慌てた。

ア「さっきこれ届けに来た時、プールへ入る時間教えて云ったから、大体二時ごろや云っておいた。見せてほしいわ云って
たから、もう来るやろ」

矢島先生は今まで隠していたことを云ったのである。

イ「わあ、矢島先生、殺生やなあ」

80 鬼内先生は悲鳴を上げたが、その時、矢島先生の手で首の紐を締められて、黙ってしまった。

ウ「そんなこと云って、よろこぶな。いやらしい」

矢島先生は、紐をもっと締めた。

エ「息つまる」

オ「鬼内さん、アヤちゃん好きなんやろ」

85 カ「無茶な。矢島さんのことですか」

キ「ごまかしな。可哀そうに、あんたが結婚してしまってから、あの子、元気がなくなった」

ク「うそです。そんな。あつ、息つまる」

ケ「水入ったら、いかなからなあ。よく締めておかんと」

コ「矢島先生、もうそれで大丈夫です。水入らしませんで」

90 矢島先生はやつと鬼内先生の身体から離れた。

ビニール水泳服の中に入った五尺七寸、十八貫五百の鬼内先生は、両方の腕を上げてみたり、ゆっくりしゃがんでみた
りして、具合を試してみている。

破れるといけないからと云って、寸法はだぶだぶに作ってもらったのである。身体が透いて見えるので、どうにも変な
恰好である。

95 鬼内先生の靴下の先に小さい穴が開いているのまで見える。

サ「アヤちゃん、まだ来んだけど、そろそろ入水するか」

シ「いやもう、こんな恰好見られたらさっぱりや。ほんまに来る云うていましたか」

ス「ほんとだつて。好きな鬼内さんがこの寒い時にプールへ入る云うのに、アヤちゃんが店でじっとしてられる筈がない
よ」

100 セ「矢島先生、自分が好きなくせて、あんなことばかりよう云えるわ」

ソ「あんたは独身、僕は子供が二人いる。僕はもう最初からアヤちゃんにそんな気はなかった。夕方なんか、アヤちゃんが
ちよいちよいこの前の道を通って、練習しているとところを覗いて行くのは、あれはあんたがいるからや。そんなことぐら
い、ちゃんとして知っているよ。それに可哀そうにアヤちゃんを放つといて結婚するなんて」

タ「放つといて、わし、何も。矢島先生、ほんまに出まかせ云いはる。アヤちゃんは美人で、ハイカラで、しっかりして
いるし、何でわしみたいな田舎ものぼうつとした者にそんなこと思いますか。わしらほんとにあの人の前へ出たら、物
も碌によう云わんのに」

チ「そこがいいんや。アヤちゃんがあんたの顔を見る時の眼と、僕の顔を見る時の眼と、違う」

ツ「また、あんなことを云う。ほんとに矢島さんの口のうまいのかかったら、何や知らん、そんな気になって来ますが。」

しかし、アヤちゃん、来るんやったら早よ来たらええのに」

鬼内先生は道の方をちよつと眺めたが、思い直して、プールの端の鉄棒の段がついているところへ行つた。

「さあ、歴史的な実験だぞ。英国探險隊のエヴェレスト征服みたいなもんだ」

矢島先生は、興奮してそんなことを口走つた。

鬼内先生は足の先をまず水の中へつけた。

「冷たいか」

矢島先生が声をかけた。

「いや、大したことない」

鬼内先生は割合無造作に水の中へ沈んで行つた。ビニールの服は水の中へ入ると、鈍色に光って身体にへばりついた。

鬼内先生の身体が、胸のあたりまで水中に入つた時である。

「入ったあ」

と叫び声^{さけ}が起つた。

矢島先生はプールのふちから身体を乗り出すようにして云つた。

「どこが破れた」

「分りません。ぱばーと、稲妻^{いなずま}みたいに入つて来ました」

鬼内先生は、プールの中に立つたまま、その感じを報告した。

「ぱばーと来たんか」

「早いこと！」

矢島先生はそれを聞くと、溜息をついた。

「入水後、十秒にして浸水^{しんすい}す。浸水箇所不明」

矢島先生は手帖^{てちよう}を出して、そう記入した。

「いま、濡れているのか」

「胸から下、全部水が来ています」

「冷たいか」

「相当冷たいですな」

鬼内先生のトレーニング・パンツもスエーターも、その下に着ているシャツもパンツも、いま水づかりになっているのである。

「心臓麻痺^{しんぞうまひ}、起すなよ」

矢島先生は心配そうな声を出した。

「大丈夫ですやろ」

「そうか。そんなら濡れついでに、ちよつと泳いでみるか」

「よっしゃ」

鬼内先生は、今では何の役にも立たない、かさばったビニールの水泳服を着けたまま、ゆっくり平泳ぎで泳ぎ始めた。

「どうや。行けるか」

「足が窮屈^{きやうくつ}ですわ。あつ、腋^{わき}のところからも入つて来ました。ちめた」

鬼内先生は情なそうな声を立てた。

「冷たいのは当り前だ。もつと泳げ」

プールのふちから矢島先生がどなった。

「腕はどうだ。窮屈か？」

「窮屈ですな。腕も股も、もつとゆったり作らんとはいけませんわ」

「首はどうだ？」

150 「首はこれでよろしいな。首はこれくらいにして泳いでいたら、入りませんわ。ああ、冷めたい。よう冷える」

「何云うか。頑張れ。アヤちゃんが祈ってる」

「もう、上りますわ。もう、無理です」

鬼内先生はそう云うと、方向を変えてプールのふちへ泳ぎついた。二十五米プールの縦半分を泳いだわけである。

鬼内先生は唇の色が青くなっている。ビニール水泳服を脱ぐと、大きな足の先に水が三合ほどたまっていた。

矢島先生と鬼内先生は、それを見て笑った。

鬼内先生がロッカー・ハウスの風呂に入って、着換えを終ってから二人でコンクリートの上にだらしなくのびたビニール服の上にかがみ込んで、浸水箇所を丹念に調べた。

その結果、右足の先と股のところと両方の腋の下と合計四カ所破れたことが分った。

二人が、これは着物スリーブ式にしないといけないと話合っている時、当の裁断者である星子アヤ子がプールの入口に姿を現わした。

それに気が附くと、二人とも何かひどく慌てて水に濡れているビニール水泳服を畳んでしまった。それはアヤ子に見せてはならない物のような気がしたのである。

「やあ、いらっしやい。惜しいことをしましたねえ。たった今、実験を終ったところです」

矢島先生は、大きな声でそう云った。

「もう十分早くいらっしやれば、水の中へ入っていると場所が見られたのに。惜しかったなあ」

165

アヤ子は、中へは入って来ないで、

「どうでしたの？ 実験は」

と尋ねた。

「大成功です」

矢島先生が叫んだ。

170

「大いに有望です。水は入りましたが」

「え、それで、濡れました？」

「ちよつと濡れましたけど、大したことはないです。とにかく、大成功です」

鬼内先生は笑っている。

「見たかったわ」

アヤ子は、そう云った。

175

「また、すぐに第二回の実験をやります。今度は、着物スリーブ式にしようと思っています。その方が、よさそうです」

「じゃあ、また持ってきて下さいね」

「ええ、お願いします。いろいろ、僕ら、研究してみましたから」

「この次は、きつと見せて下さいね」

「ええ、是非。惜しかったなあ、今日は。とてもよかったですよ。僕ら、感激しましたねえ」

「ごめんなさい」

「ああ、さよなら。また来て下さい。どうも済みませんでした」

アヤ子は行ってしまった。

180

「さあ、うどん屋へ行こう」

矢島先生は勢いよく云った。

鬼内先生は校舎の横を曲って行くアヤ子の姿を見送っていたが、それを聞くと、さっき大急ぎで疊んだ、濡れたビニールの水泳服を持ち上げて、ロッカー・ハウスの方へ歩き出した。

※注 ・陸軍士官学校：兵士に対して作戦の指示を出す士官を教育する陸軍の学校。

・アノラック：登山やスキーなどで着るフードつきの防寒・防風用の上着。

・聯関：連関に同じ。

・充溢：満ちあふれること。

・スエーター：セーターのこと。

・殺生：思いやりがないこと。

・ごまかしな：ごまかしてはいけない。

・五尺七寸、十八貫五百：五尺七寸は長さ約一七二・七センチメートル、十八貫五百は重さ約六九・四キログラム。

・ハイカラ：洋風でしゃれていること。

・鈍色：濃い灰色。

・三合：五四〇ミリリットル。

・着物スリーブ：肩と袖の切れ目やぬい目がない袖の形。

問一 ―部A「水の泡」―部B「無造作」とありますが、本文中での意味に最も近い表現を後の中からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

A「水の泡」

A 対岸の火事

I 寝耳に水

ウ 元の木阿弥

エ 藪から棒

B「無造作」

A 苦もなく

I 念入り

ウ 軽はずみ

エ 不慣れ

問二 ―部①「考え込まれては大変と、膝を乗り出して云った」とありますが、「矢島先生」がこのような行動をとつ

たのはなぜですか。「矢島先生」が考えていた内容にも注意して、その理由を六十～八十字で説明しなさい。

問三 ―部②「そんな気になって来ますが」とありますが、これは「鬼内先生」にとってどのようなことを表していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A 以前抱いていたアヤ子に対する感情を思い返してしまったということ。

I 知らないうちにアヤ子への思いが強まってきた感じがするということ。

ウ アヤ子の気持ちに寄り添えなかった自分にあきれてしまったということ。

エ 口車に乗せようとする矢島先生に対して腹を立ててしまったということ。

問四 ―部③「ぱぱーと、稲妻みたいに入って来ました」とありますが、これはどのような様子を表していますか。

その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 水泳服の破れ目から入り込んでくる水の量が多い様子。

イ 水泳服の破れ目から入り込んでくる水の動きがとても速い様子。

ウ 水泳服の破れ目から入り込んでくる水が非常に冷たい様子。

エ 水泳服の破れ目から入り込んでくる水が音を立てている様子。

問五 ―部④「溜息をついた」とありますが、この時の「矢島先生」の心情を表す表現として適当でないものを次の中

から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 罪悪感 イ 失望感 ウ 敗北感 エ 無力感

問六 (i) (ii) の小問にそれぞれ答えなさい。

(i) この文章『ビニール水泳服実験』をUJ中学校の授業で扱った時に、生徒から「アヤちゃんはモテるよね」という発言がありました。これをもとに、「アヤちゃんは人気者!」というテーマを立ててグループ学習を進めました。登場人物の発言や様子などを参考にしながら考察した時の発言内容は次に示すようなものです。話し合いは、本文中に示されているアーツの会話文が **A** **F** の部分で引用されながら進められました。 **A** **F** に入る最も適当な会話文をアーツの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

Aさん ビニールで水泳服を作って欲しいという依頼は、突拍子がないものだけれど、星子洋裁店の主人であるアヤ子さんは、首部分の作り方を確認するなどして、とても前向きにビニール水泳服を作ろうとしています。「アヤちゃん」と呼ばれて慕われているのは、そんな彼女の様子を見ても分かるんだけど、たとえば、76行目から109行目あたりを読むと、そんなアヤちゃんに二人の先生が「あこがれ」を抱いていることが分かると思うんだけど、どうかな？

Bさん 私もそう思うわ。アヤちゃんを巡る二人の先生のやり取りは笑っちゃう展開よね。まず鬼内先生の発言に注目すると **A** の部分で、自分のことを田舎者という鬼内先生にとって、アヤちゃんは、まさに「マドンナ」・「高嶺の花」として映っていたのよね。鬼内先生が結婚した後も、そのように思っているかは分かんないけれど、矢島先生が **B** で言っていることがもし本当なら、今でも鬼内先生は、アヤちゃんのことを思っているのかもしれないわ。

Cさん 矢島先生の名前が出たけど、私は矢島先生のアヤちゃんに対する視線が気になるのよ。たとえば、**C** では、鬼内先生が結婚したあとのアヤちゃんの様子を、それに **D** の部分では、プールをちよくちよく見に来るアヤちゃんの様子を、さらに言えば **E** ではアヤちゃんの眼の動きにまで触れているよね。矢

島先生のほうが、鬼内先生より、よっぽどアヤちゃんのことを意識しているんじゃない？

Dさん　なるほどね。そうだとすると、二人ともアヤちゃんを気にかけている点では同じかもしれないね。でも、今Bさんが触れた **E** の発言に注目すると、アヤちゃんは矢島先生に向けない視線を、どうして鬼内先生には向けるのか、といった意味が込められているようにも読めそうなんだけれど……。

Eさん　つまり、矢島先生の鬼内先生への嫉妬しどということかな？　もしそう考えるなら、鬼内先生に水泳服を着せている時の **F** という一言は、鬼内先生へのあてつけであり、仕返しのような意味なのかもしれないね。

Fさん　そうだね。とは言え、二人のやり取りは、ばかばかしくも、ほのぼのとした印象を伝えるね。ビニール水泳服の実験は結果的に失敗に終わるけど、155行目「矢島先生と鬼内先生は、それを見て笑った」とあることから、もともと二人は仲が良かったんだよ。

Aさん　これまでの話をまとめると、矢島先生は鬼内先生に少しやきもちを焼いているようだけど、それも含めて二人の男性から好意を持たれている点で、「アヤちゃんは人気者！」であると言っていると思います。

この点を踏まえると、ビニール水泳服の実験が失敗に終わった場面で、アヤちゃんがプールを訪れた時、――部⑤「それはアヤ子に見せてはならない物のような気がしたのである」と述べられている部分がありますが、二人はなぜこのような「気がした」のでしょうか？　みなさんはどのように考えますか？

(ii) (i) のグループ学習での発言内容をふまえて、――部⑤「それはアヤ子に見せてはならない物のような気がしたのである」という部分について、その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ビニール水泳服で泳ぐ鬼内先生の姿を見せると、アヤちゃんが切ない気持ちになって気の毒であると考えたから。

イ　実験に失敗したビニール水泳服を見せて、せっかく作ってくれたアヤちゃんを失望させてはいけないと考えたから。

ウ　ビニール水泳服の破れた部分を見せると、これまで築いてきたアヤちゃんとの関係が悪くなってしまうと考えたから。

エ　水が入り込んでしまったビニール水泳服を見せると、アヤちゃんの次作への意気込みが強まってしまうと考えたから。

[illegible][illegible]

受験番号	氏名		